

## 第六回

とうとう自分たちが口から吐き出した梅干しの種を、盲目の人が潮干狩りで貝を探すように、泥水につかした土の中を探り、泥と一緒につかみだし、その中に種をみつけると口に放りこんでは奥歯で力チツと噛み砕き、中の天神様、子葉を食べるまでに追い詰められた。

敵の通信士が階段を上がってくる足音がすると、また朝がきたなと思い、われわれはお互いが生きていることを確かめあった。わが軍による奪還の期待は諦めに変わっていた。

いよいよわれわれはこれまでか。この壕に閉じこめられて幾日になるかもはつきりしないだが、何かいい方法はないのか？

ここを脱出し、生き延びるにはどうしたらいいか。二人ともいくら考えてもいい方法が浮かんでこない。外の状況が分らず、敵がどの程度どこにいるのかを知らなければ、何の対策も立てられなかった。

### 偵察

九月になっていたと思う。

外へ偵察に出るにしても、月明りの口では「さすらの姿が丸見えになってしまうので、絶対に発見されずにすむ口、曇りの深夜を選んだ。

天井の穴は小さく、宮川より私の方が体が小さく軽かったので、私一人外へ出てみることにした。宮川の肩を踏み台にしてよろよろと立上がり、天井の穴にかぶさった椰子の葉をそとどかした。首を出し、キョロキョロと一回り外を見回した。穴の中の暗がりには慣れた眼でなら、外の暗闇など明るいものだ。

案の定、穴の目と鼻の先に、通信の中継基地らしい簡易的なテント小屋があった。敵兵は中にも、外にも姿はない。

穴から這い出し、腹這いのままゆっくり前進しては辺りを見回した。どこもかしこもあれだけあった椰子の木は、爆撃でほとんどなぎ倒されていた。

爆弾でできた穴もあちこちにあり、這いずって行って、その穴から島全体を見渡すと日本軍が逆上陸してきたときのためだろう。島の周りは鉄条網で張り巡らされていた。発電所のそばには番兵がいつもいるらしい塔もできていた。まわりには、砲撃で飛び散った兵舎のトタン屋根があちこちに散乱し、風でカラン「ロ」の音を立てていた。

この分なら少々の物音は聞こえないかと安心した。島の入口にあつた工作科の兵舎も木の棧橋も、資材置き場もなかつた。十三ミリの機銃と、向かつてくる敵機を打ち損じると動きの鈍い旧式の高射砲も、そのまま追つても追いつかず、反転してくる敵機とは反対側へやつと回して迎え撃つしかなかつた。大正七年砲も、山の頂上には無論なかつた。

三十数日ぶりの外の空気はつまかつたが、そうそうゆづくりもしていられない。椰子の実ぐらい持つて戻りたいと探したが、敵兵に拾われてしまつたのだらう。なかなか見つからないうちやつと一っだけ引きずつて、宮川の待つ元の壕へまた戻つた。

昼は勿論夜もあちこちに敵がいそうな気配だ。とてもうかつに飛び出すわけにはいかないといふことが、われわれの結論だつた。しかし、向い側の西フロリダ島へ泳ぎ渡りさえすれば、あちらには果物もあるのです。森林に身を潜んでいれば生き延びられるだらうと、二人で話した。

戦況はどうなつていくか定かではなかつたが、米軍の反攻が強まっているように思えた。

## 敵の侵入

それから数日後、敵が行動している屋間、われわれは眠っていた。その耳元に、入口付近でカチンカチンと、なにか打つ音に眼を覚ました。英語で賑やかに話したり、歌をうたつたり、鶴嘴のようなもので六、七人の者が入口を掘りはじめている様子を仰天した。

咄嗟にダイナマイトを仕掛けるのだなと思つた。

つづく